丸小だより

令和２年１月31日（金）No.10

横浜市立丸山台小学校長　　新井　篤志

～ 実践目標　自分が輝く、みんなも輝く ～

「ピンクシャツデー」

副校長　青柳　英樹

令和最初の新年を迎え、翌週には元気いっぱいの子どもたちが丸山台小に戻ってきました。そう思っているうちに、早いものでもう１月が終わりになります。１２月には本校でもインフルエンザによる欠席者が増え、学級閉鎖となるクラスもありました。この冬も学校では、毎朝廊下の窓を開け、校舎内の換気を行っています。休み時間には、教室の換気とせっけんを使った丁寧な手洗い、うがいの励行を、放送で呼びかけています。マスク着用など、ご家庭のご協力もあり、この１月は（２９日現在）インフルエンザによる欠席者は一人もいませんでした。

さて、学校には毎日たくさんの文書や荷物、郵便物等が届けられます。その中に、目に留まったものがありました。それはピンク色のＡ４版のチラシで、上半分ほどのスペースに大きく「ＰＩＮＫ　ＳＨＩＲＴ　ＤＡＹ」とありました。これはいったい何だろうと思い、じっくりと目を通してみました。すると、次の文章がありました。

> 物語の始まりはカナダ・バンクーバー。ピンクのシャツを着た男子生徒がからかわれ、いじめにあいました。２人の上級生が「ぼくらもピンクのシャツを着て、いじめストップを！」と提案。翌日、呼びかけに賛同し、ピンクのシャツや小物を身につけて登校した生徒たちで学校中がピンク色にそまり、いじめはストップしました。

この文章を読んだとき、似たようなことが身の回りであったことを思い出しました。以前勤務していた学校の若い男性の先生の事です。ある日、その先生が真っ赤なポロシャツを着た日がありました。数日後、その先生のクラスの保護者から、「先生のおかげでうちの子（男児）は救われました。」と感謝の言葉を述べられたそうです。訳が分からず理由を聞くと、「先日、うちの子が赤いシャツを着て学校に行ったら、隣のクラスの子から女の色を着ているとからかわれて、落ち込んでいたのです。でも、先生が赤いシャツを着てくれて、だれも何も言わなくなりました。」ということだったそうです。その先生は、自分が着たくて赤いシャツを着ただけで、赤色が男性のものだとか女性のものだとかは全く思っていませんでした。しかし、子どもの中には、このような意識のある子もいるのだと気づいたそうです。

夏にはオリンピック・パラリンピックが開催され、いろいろな国・地域の方が来日し、私たちとの違いを映像等から感じることでしょう。その違いを認め合うことも、大きな大会が成功する重要な要因の一つだと思います。認め合いを学ぶよい機会となることを願いながら、日常の身近な認め合いを大切にしたいと思います。